2021年度テーマ

協働のかたち 4

デザイナーとの協働

インタビュー

より良い空間は共感し合える関係から

参加者　安東陽子　テキスタイルデザイナー／安東陽子デザイン
岡安　泉　照明デザイナー／岡安泉照明設計事務所
小林賢二　造園家／小林賢二アトリエ

聞き手　関本竜太　『Bulletin』編集長／リオタデザイン
『Bulletin』WGメンバー

左から、関本竜太編集長、会田友朗さん（『Bulletin』WG）、岡安 泉さん、安東陽子さん、小林賢二さん

2021年度特集「協働のかたち」、第4回目は「デザイナーとの協働」がテーマです。かつては建築家が建築に関わるすべてのデザインを行っていましたが、今はさまざまなデザインフィールドのスペシャリストと協働し、ともに建築のデザインを高め、より魅力的でより機能的な空間を生み出しています。今回は安東陽子さん（テキスタイル）、岡安泉さん（照明）、小林賢二さん（造園）に、建築家とどのようにコラボレーションをしているのか、お話をうかがいしました。

今の仕事をはじめるまで

関本　まず、皆さんが今の仕事をはじめるきっかけをお話しいただけますでしょうか。

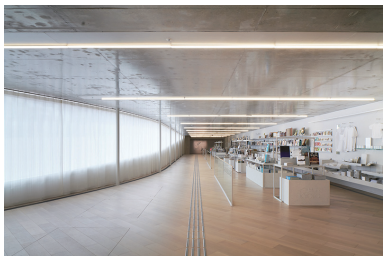
安東 テキスタイル　私は武蔵野美術大学短期大学部のグラフィックデザイン科を卒業後、すぐには就職せず1年ほど染色の勉強をしたりしていました。その頃、生地を扱う会社でアルバイトとして働きはじめ、その後社員になり、はじめの数年はその会社がデパートの一角に出していたショップで販売を担当しました。限られたスペースでしたが、ディスプレイを工夫したりして、接客と同時に空間づくりを経験しました。その後、本店のショールームに移ってからは、ファッションや洋服ではなく、カーテンなどインテリアを担当する機会が増えました。当然、建築家やインテリアデザイナーと仕事をすることも増えて、一般のお客様のインテリアのコーディネートをしながら、建築家やインテリアデザイナーが来店するのを待つようになりました。そこで、布を探しに来られた伊東豊雄さんや青木淳さんと出会いました。青木さんはルイ・ヴィトン表参道ビル（2002年）のホールの内装に布を使うことを考えておられ、それが青木さんとの最初の仕事になりました。

その後も約10年働き、トータルで19年勤めました。ショールームでは、最初は建築家との仕事は年に数えるほどでしたが、2000年頃から伊東さんや青木さんとの仕事がきっかけとなり少しずつ建築家と仕事をする機会が増えていき、2011年に独立しました。

岡安 照明　僕は日大の農獣医学部出身で、大学卒業後は農林水産省の外郭団体で働いていました。大学を卒業したのが1994年で、当時、ガット・ウルグアイ・ラウンドで日本の農業を強くしなくてはいけないと、研究開発に国から大きな補助金が充てられていました。そのような環境の中、6年間いろいろな開発をしていたのですが、その後補助がなくなるタイミングで仕事を辞めることにしました。持っているスキルは機械製図くらいだったので、機械製図で雇ってくれる会社を探したら、就職情報誌に「照明器具メーカーを創業します」という記事を見

[安東さんの協働事例]

「みんなの森 ぎふメディアコスモス」
設計：伊東豊雄建築設計事務所



「京都市京セラ美術館」
設計：青木淳・西澤徹夫設計共同体

「白井屋ホテル」
設計：藤本壮介建築設計事務所
（この頁すべて撮影：阿野太一）

つけ、必要なスキルが機械製図だったので、そこで働くことになりました。それから照明器具の設計をしています。

当時、設計者が光学的な特注照明をメーカーに頼むと、だいたいメーカーから会社に話がきて、それを設計していました。いろいろなメーカーの図面枠を使って作図し、各メーカーの営業マンや技術者に渡す。そして次第に「説明しきれないから一緒に来てほしい」と言われ、いろいろな打ち合わせに行くようになりました。そうするとそのうち「あれ？あなた他のメーカーで来なかった？」と気づかれてしまい……。その頃、一緒に仕事をしていた建築家に、「独立して自分でやってみたら」と言っていただいたり、当時相談を受けていた件数もそこそこあったので、独立することを決めました。

勤めていた会社は照明器具をつくる会社で、創業したてだったので要望があれば特注品をつくっていましたが、本来製造メーカーは建築家やデザイナーと組んでものをつくるのは、リスクが高すぎてあまりやりたがりません。そのようなこともあり、僕はデザインに専念するために独立し、その会社とは今も関係性は続いています。

関本　小林さんは建築学科のご出身ですが、造園家になったいきさつを教えてください。

小林 造園　僕は大学で建築を学び、卒業後はインテリアとプロダクトを扱う剣持デザイン研究所に通いはじめました。バブルの終わり頃で、ディスコブームやDCブランドブームなどがあり、インテリアの世界もとても賑やかでした。インテリアデザインにファインアートのような魅力も感じていました。一方で、できては消えていく一過性のデザインの儚さを感じたり、オフィスインテリアが主だった事務所の仕事を続けることに迷いもあって事務所を辞めて、半年間中東やヨーロッパを旅しました。

たまたまエジプトに友達がいたので行ってみると、そこには4000年前の石の柱が残っているわけです。それまで僕にとっての石はインテリアのサンプル帳に出てくるものでしかなかったのですが、悠久を感じさせる遺跡を歩いて石に対する興味が生まれました。また、イタリアに行くと中世の街並みが残っていて、石の道には轍がそのまま残っている。そういう長く残る風景にとても魅力を感じました。帰国後は、そのような景観づくりへの興味から、今度はランドスケープの設計事務所で働きはじめました。

ランドスケープの仕事をはじめると当然植栽設計が出てきます。その事務所は国立にあったので自分も国立に引っ越し、植物のことを覚えようと、自分の家の庭をつくり始めました。それが27、28歳の頃です。事務所には3年ほど勤め、事情があって独立しましたが、その後もその事務所の仕事を手伝いながら個人での仕事もはじめました。

僕はその頃から彫刻家としても活動しているのですが、山神をテーマにした露天風呂を数名の彫刻家がつくるという企画があり、それに参加しました。そこで僕は、露天風呂を空間彫刻のようにランドスケープ作品として捉え、初めて自分の作品に植物を計画しました。ランドスケープの仕事をしていたのでさすがに植物の名前は覚えていましたが、生態まで把握しているものは数少なかった頃です。自分が描いたプランにどんな植物を選ぼうか、植物が1年を通してどのようなストーリーを描くのかなど、本を広げながら毎日夜な夜な考えました。それがとても楽しかったのです。その時に、植物と自分の相性の良さのようなものを感じ、それから本格的に庭づくりを自分の仕事としてスタートさせました。

建築家との出会い

関本　三者三様ありながらも、共通のキーワードになっているのが人との出会いではないでしょうか。
造園家としての小林さんを見出したのは、家具デザイナーの小泉誠さんだとうかがいました。

[岡安さんの協働事例]

「UNPLAN Kagurazaka」設計：アイダアトリエ

「UNPLAN Shinjuku」設計：アイダアトリエ

「LifeWork」設計：アイダアトリエ
（この頁すべて撮影：野秋達也）

小林 造園 小泉誠さんも国立にご自宅と事務所があり、僕のアトリエが小泉さんの通勤路にあって、庭が変わっていく様子を見ていてくれたのです。小泉さんは家具デザイナーと名乗っていますが、建築のプロジェクトもされていて、その頃小泉さんが千葉の方でつくっていた住宅の造園を手伝ってくれないかと声を掛けてくれました。僕はその前にも他の建築家と住宅の庭をつくっていたのですが、そういう仕事をもっとしていきたいと思っていたタイミングで小泉さんと仕事をすることになり、そこから住宅の庭づくりが増えていきました。ここ6、7年のことです。

関本 安東さんにとってやはり伊東豊雄さんや青木淳さんとの出会いが大きな転機だったと思われますか。

安東 テキスタイル 初めて青木さんとお話しした時、青木さんはルイ・ヴィトン表参道ビルのホールについていろいろ説明してくださいました。「ホールは白い大きな空間で、トランクの中に入ったようなイメージ。トランクの中は窮屈というイメージがあるけれど、心地よく閉じた空間にしたい……」というように私に丁寧に説明してくださり、初めてお会いしたのに私なりにその空間を共有することができました。それから、青木さんが直接おっしゃったわけではありませんが、「建築家が考えていることを共有することがとても大事だ」というメッセージを会話の中から受け取ることもできました。

この青木さんとの仕事を通して、建築家の考えをよく理解して自分の感性を直接つなげることが、協働作業の最も大事なことだと後から考えるようになりました。自分が建築家の役に立っているのではないかと思えたのもこの時が初めてで、やはり自分にとって転機と言える大きな出会いだったと思っています。ファッションとしてではない生地の可能性を感覚的に教わったのもこの時でした。

青木さんは完成したテキスタイルをとても気に入ってくださいました。この時のことをもとにして、それ以降、建築家のリクエストに応えるために自分の持っているものを最大限発揮しようと努めています。

青木さんとはその後もお仕事をご一緒させていただいていますが、毎回きちんと根本的なところから概念を話してくださり、自分なりに想像してテキスタイルをデザインしています。

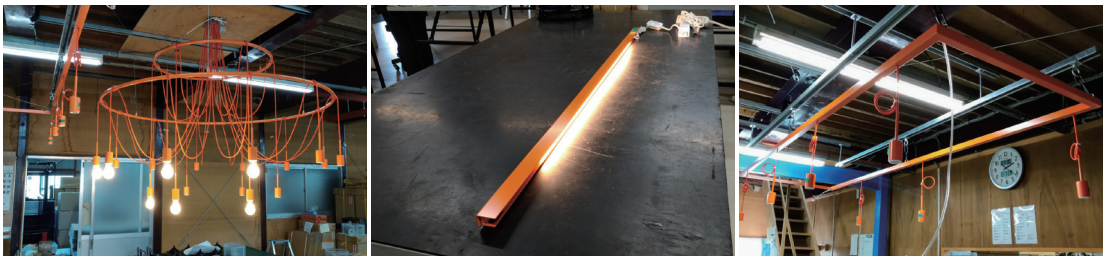
さまざまな仕事に対応する

関本 岡安さんも照明デザイナーとして活動されておられる一方で、建築家とコラボレートすることもあると思います。どのような関わり方をされているのでしょうか。

岡安 照明 関わり方はプロジェクトによってすべて異なります。建築家が建物の大きなコンセプトを決めるタイミングで、光で何かできないかと相談されることもあれば、ほぼ完成している空間に最後に照明を入れてほしいという時もあります。その中で、自分のやっていることは幅広くて、例えば、照明器具をデザインしてつくることもあれば、光学設計をしていくこともあったり、昼光計算をしたり、コンセプトワークもあります。光にまつわることすべてに対して、相手がそのプロジェクトで望んでいることをサポートしています。

小林さんが彫刻家の顔をお持ちのように、僕も自分のプロジェクトとして、つくりたいものを表現することがありますが、それ以外は基本的に設計者がしたいことを実現できるようにエンジニアリングサポートに徹しています。

建築家との関係性においては、特段特徴的なものがあるわけではありませんが、仕事を依頼される時に、全く実現できないようなことを言われても、当たり前ですがどうにもできません。「この空間のあの部分が少しでもこうなったらすごく面白いものになりそうなんだけど、可



「LifeWork」の照明を工場で確認

能性あるかな？」というような話だと挑戦してみたくなります。そういう話の振られ方をすると、ちょっと気分が盛り上がりますね。

関本　伝えるほうに明確なビジョンがあると共有できるのかもしれないですね。

岡安 照明　設計者が自身の理想像に対して、どの程度幅広く受け止められるかということでしょうか。僕が、今持っている技術に新しい要素を加えたら、こういう環境がつくれるかもしれないと提案した場合に、設計者が「あぁそれだ！」と受け止めてくれて、さらにそれに合わせて空間を柔軟に考えていくようなことができると、そこからはどんどん展開していって、光がすごくドライブする空間をつくることができたりします。

関本　旧態依然とした元請け下請けのような関係性の中では何も生まれないけれど、対等な関係性だからこそお互いにドライブし合えるのでしょうね。そういう瞬間は興奮しますし、自分が持っているもの以上のものが生まれてくるかもしれません。
小林さんは、設計者が変わると同じ植栽を扱うのでもニュアンスが変わってくると思いますが、そのあたりはどのように受け止めているのでしょうか。

小林 造園　建築家によって庭のことをどのくらい考えているかはさまざまです。建築まわりの外構全てのデザインをすることもあれば、建築家が前庭の駐車スペースまですべて計画していて、あとは植栽するだけという時もあって、それはそれで喜んでやります。住宅の造園に関してはものすごく受け身です。

ランドスケープアーキテクトとして、敷地のどこに建物を配置するかというところから設計できるのが理想だと思っています。ただそんな仕事の理想とは別に、とにかく庭のある暮らしを楽しんでほしい、庭のある住まいが増えてほしいという思いが強くなって、どんな条件の庭づくりも僕が役に立てそうであれば引き受けるようになりました。

それから、建築家や住まい手によって庭をつくる過程はさまざまですが、どの現場でも工事が終わった時に、「いいねぇ！」と仕上がった風景に納得できるところまでやり切らないと仕事の満足は得られません。現場でのアドリブが物をいうのが造園だと思います。どんな関わり方の仕事でも、それぞれのプロジェクトに似合った最良の形を導き出せるように最後の作業まで集中して、笑顔の現場で終われるようにと心がけています。

空間にとっての最善を探す

関本　建築家もクライアントがいて、ご要望を聞いたり、状況を受け入れる立場にあり、皆さんと同じような構造があります。そのような場合、受け身と言いながらも、相手がほしいものに対して一歩先のものを提案するのが我々の仕事に求められていることのようにも感じています。
建築家に提案する時に、工夫していることや心掛けていることはありますか。

安東 テキスタイル　建築家によってつくり方も考え方も異なりますし、ひとつひとつつくる空間も違うので、自分のやり方というのはあまり決めないようにしています。

提案する時は、その窓に本当にカーテンが必要なのか、カーテンによってその空間をダメにしてしまわないか、施主との対話を通じて毎回考えるようにしています。やはり、カーテンによって暮らしやすくなったり、使いやすくなったり、美しくて楽しい空間になったり、そういう良い効果を生み出せるように、自分なりに工夫しています。

それから、カーテンは選択肢がとても広いのです。例えば、ここに赤いカーテンを付けるとこういう効果があるかもしれないというように、いろいろな可能性があるのです。また、設計者がつくりたい空間にベストなもの

[小林さんの
作品と協働事例]

植栽計画の楽しみを覚えた作品「木花開屋姫命」1997年　企画設計：BANインターナショナル（撮影：フォワードストローク）

「つむじ・i-works2015」 設計：伊礼智設計室

「西浦の家」 設計：Koizumi Studio

を考えることが大切で、ときにはメーカー品の中から選んできたり、必要に応じて特注のものをつくったりさまざまです。

建築の最後の仕上材

会田（『Bulletin』WG）　以前安東さんと対談させていただいた時、カーテンのことを「建築の修羅場」を一手に引き受ける存在だという話になりました。機能や使用など施主の生活にいちばん近いですし、現場に入るのも工期のいちばん最後です。もしかしたら照明や造園も最後のワンフィニッシュでガラッと空間を変えるという意味では似た存在かもしれません。

安東 テキスタイル 私もカーテンは建築の最後の仕上材だと思っています。カーテンも建築の一部ですし、私は建築家チームの1人ですから、住宅など施主の顔が見える場合は建築家と施主の間に立ってうまく話しながら、最終的にはその建築に合うものに導くようにしています。

建築に関わる仕事は一般の方にとっては難しそうなイメージがあるかもしれませんが、住宅でも公共建築でも、人との関わり方など、普通の感覚がとても大事だと思っています。私は建築の勉強をしてきていませんし、大学でテキスタイルを学んだわけでもありません。現場で自分なりに学んできただけなので、いつもどこか素人なのです。だからこそ、わからないことがあれば専門家にすぐ聞いたりできるのかもしれません。

私は肩書きも「テキスタイルデザイナー・コーディネーター」としています。現場に合わせてコーディネーションしますし、デザインする必要があると思えばできる。そのあたりは緩やかに自由にやっていきたいと思っています。

関本　専門教育を受けていないから謙虚でいられる、ずっと素人でいられる。それが安東さんの仕事のスタイルに大きく作用しているように感じました。

安東 テキスタイル いろいろな設計者といろいろなプロジェクトで仕事をさせていただいているので、経験からの引き出しはありますが、それを毎回リセットして手ぶらで打ち合わせに行く、そういう感覚もあるかもしれません。

関本　それはとても難しいことだと思います。経験を積むとどうしても手癖がついたり、挑戦するというよりは無意識に間違いのない方を選んでしまいます。

安東 テキスタイル あまり話す前からこうと決めていかない、要するにカタログを持って行かないということです。もちろん最終的には自分の経験からいろいろなものを駆使してつくります。

小林 造園 私も造園に対して素人という意識がありますが、先入観というか、経験からこうすればうまくいくということがあって、毎回リセットして臨むなんて考えられません。自分の過去の事例を集めてプレゼンするというやり方をしてしまっています。

安東 テキスタイル 私の場合、建築家の皆さんが私の今までの仕事をネットで探して見て、イメージをまとめてくださることもあります。それでも、やはりいろいろな可能性を狭くしてはいけないと思っています。

関本　実績を積むと、過去の作品にイメージリソースが引っ張られていることがあり、自己模倣のようなところに陥ってしまうことはないでしょうか。

安東 テキスタイル それを建築家が望むのであれば、全然やってもいいと思っています。ただ、建物が違えば条件も違うので、全く同じパターンで同じ物というのは合わないと思うのです。ですから、もちろん希望はお聞きして、あの時はこういう状況だったからこう見えたということを説明し、同じような雰囲気を望むのであれば、「もう少し生地を厚くしましょう」とか、「パターンをもう少

「軽井沢の家」 設計：田中敏溥建築設計事務所

リオタデザイン設計「KOTI」の造園風景。現場でのアドリブも大事に、自ら施工することで責任を果たせるのも造園のいいところ（撮影：関本竜太）

現場作業用のオリジナルTシャツも造園するように楽しみながらデザイン （撮影：関本竜太）

し大きくしましょう」などと提案して、建築家が望む空間に近づけるようにします。

関本 建築家にとって、カーテンや照明、造園は自分の建築を引き上げてくれる存在だと捉えています。今のようなお話を聞くと、コラボレーションしてみたくなります。

相手が望む空間を想像する

関本 提案する時は空間を立体的にイメージすると思いますが、誰でもできることではないでしょう。そういったことは実務経験から鍛えられたのでしょうか。

岡安 照明 そうですね。図面から自分で手描きでパースを起こす練習をして、だんだん空間を把握できるようになりました。

関本 照明には照度計算があります。日頃から数字でご自身の仕事の照度を押さえているのでしょうか。

岡安 照明 はい、どんな時でもそれが必ずありますし、仕上げの色さえ教えてくれれば、ほぼその場で照度計算をしています。

関本 ある人にとっては明るくても、ある人にとっては暗いというように、人それぞれ感覚の違いもあると思います。そのあたりはどのようにアジャストしていくのでしょうか。

岡安 照明 感覚を完全に共有するのはほぼ不可能ですので、その人の感覚を教えてもらわなくてはいけません。基準上十分な明るさでも、利用する人が明るさが足りないと感じるのなら、照度を上げていきます。それから、相手の年齢が高ければ少し明るめに設計したりもします。

また、一般的にこのくらいの照度がいいと言われる空間に対して、意図して少し明るめ、または暗めでいきましょうというケースももちろんあります。

安東 テキスタイル カーテンは外と中をつなぐフィルターのような役割ですが、季節や時間帯、天候など条件によって見え方が変わります。施主にプレゼンするときにはまずそれをお伝えします。利用者がどの時間にそこに長く居るのかによってデザインしたり、1日の中でカーテンがきれいに見える時間帯があるので、そこにスポットを当ててデザインすることもあります。テキスタイルは周りの環境に影響されやすい素材ですし、それだけ周りにも影響を与えるという両方の作用があるので、それを建築家と共有して、考えていくことが大事です。

関本 カーテンの素材や色などを決めるのは、経験値からなのでしょうか。それとも直感でしょうか。

安東 テキスタイル 空間から受け取る感覚を大事にしています。もちろん設計者の要望にも柔軟に対応します。

テキスタイルは、感覚的な部分と機能の両方を満足させなくてはなりません。そして、どんなに機能を担保しても「いい遮光具合だね」と言う人はいなくて、最終的には「きれいだね」ということが評価になってしまいます。ですから、テキスタイルの機能とデザインの両立はいつも意識している重要なポイントです。

関本 小林さんは仕事のクオリティを守るために心がけていることはありますか。

小林 造園 限られた造園予算の中であまりデザイン料をプラスしたくないので、設計図を積み重ねるのに時間をかけるのではなく、最低限必要な図面だけを用意して、あとは現場で頑張るようにしています。もうひとつ、造園にCAD図は感覚的に合わないという思いが強くて、いまだに手描きの図面だけで仕事をさせてもらっています。

また、住まい手の庭との関わり方や、何を求めているのかをできるだけ察して、提案の資料を相手によってほ

建築との調和を図りながら描く、小林さんの立面スケッチ。あっさりとしたタッチは、実際に植栽する木々の姿にも反映されている。(「浜田山の家」 設計：伊礼智設計室)

んの少しだけ変えています。例えば、1年間の植物のカレンダーのようなものを作ったり、花の写真を揃えたり、この人にはこういうものを見せた方が伝わるかなと自分なりに想像して提案するようにしています。それから、いつも提案時に立面スケッチを描いて渡すのですが、そのスケッチは実際にできあがる風景よりも木の緑量を少なくして、なるべくあっさりと描くようにしています。

関本　普通提案する時は、より見栄え良く描くものではないでしょうか。

小林 造園　昔はもっと描き込んでいたのですが、住宅の庭を提案する際に建築を消さない程良いタッチが身についてきたのかもしれません。プランとスケッチは造園イメージと見積りの根拠だけを伝えて、完成した時にスケッチ以上の実際の石や植物の力を実感してもらいたいのです。

それから、お2人の話を聞いて、造園にはあまり機能がないと感じました。もちろん、遮蔽したり、歩くことを誘導することはありますが、それはどうしても必要な機能ではない場合が多いです。機能のない自由さが造園の魅力の1つかもしれません。僕もカーテンや照明と同じように最後に現場に入りますが、修羅場というような雰囲気は全くありませんし、僕はただ現場を楽しんでいるだけです。造園の工事をすると、建物の雰囲気がガラッと魅力的に変わりますし、本当にやりがいのある仕事だと思っています。

早い段階からの協働でより良い空間を

関本　最後に建築家と協働するうえで、建築家に望むことなどあればお聞かせください。

岡安 照明　人工光に対して興味がない人が多いのが少し残念です。照明によって、当初案から空間が劇的に変化していることもあると思っていますので。

人工光をうまく操ればこれまで見たことのないような建築空間ができる、というような期待を建築家自身が抱いてくれたら、協働もより面白くなるのではないでしょうか。僕はどうせつくるなら今までにないものをつくるべきだと思っています。建築家も建物ごとにクライアントや与件が違うわけですから、それがうまく噛み合った時に何か今までにないものをつくれるチャンスが起きる可能性はあると思うのです。

関本　協働する場合は、どのタイミングで相談するのがよいでしょうか。

岡安 照明　まだ具体的なプランがない時に、つくりたい空間と光のイメージを一緒に話していくのもいいでしょう。それが本当の意味でのコラボレートかもしれません。

それから、照明は最先端のものが民生化されて使えるようになったり、まもなく民生化されるであろうものなど、技術の進歩・変化が速いです。使用する器具によって実現できる空間が決まってくる可能性もありますから、最新の情報を知るのも大切なことではないでしょうか。せっかくですから僕の知識や経験を建築に生かしていただきたいです。

安東 テキスタイル　全部お任せされたり、好きなようにつくっていいと言われることもあります。もちろんできますが、私としては建築家との協働に喜びを感じています。もともと生地は作り方からして規制があります。パターンのリピートでないといけませんし、機(はた)の大きさも限られている。でもそういうものを乗り越えてつくるのが面白いのです。建築における協働でも条件があればあるほど逆に新しいチャンスが生まれて面白いので、建築家には自分の持っているイメージをこちらに伝えていただきたいです。そうするとお互いに共鳴して新しいものが生まれたり、そこにふさわしい美しいものができる可能性

が高まります。

私の仕事は決して「好きな絵を飾ってください」と言われるようなものではなく、最終的に使う人にとって良い空間になるように、建築家とさまざまなことを共有しながらつくっていくことです。お互いに自分の仕事に責任を持ち、その一方で空間のために協力し合える関係性ができれば本当にいいものができると信じています。

小林 造園 もし造園家と仕事をしたことがない人がいたら、ぜひ1度経験してほしいと思います。何か違いを感じていただけるのではないでしょうか。植物が立ち上がることによって生まれる光がありますし、それは建物にも影響するでしょう。庭に魅力を感じ、大切にしてくれる建築家が増えることを望んでいます。

それから、なるべく土を残してほしいというのが僕の願いです。少しでもむき出しの土があれば、植物が育つことができ、何かしら暮らしに面白い物語を増やすことができます。自分の小さな庭づくりから学び始めた僕の体験から、とにかく土さえあればという発想が基本にあります。本当はプロジェクトの最初から関わり、庭も含めて一緒に建物の話ができたらいいのですが、それに限らずに、リノベーションの仕事でも喜んでもらっていますし、とにかく土を残してください。敷地全体が舗装された住宅が連なる街と、庭がある住宅が連なる街では全く風景が異なりますし、気温も変わってきます。家と庭が連なって街並みができて、毎日目にする風景が生まれている。その意識をいつも共有して協働できたらいいですね。

関本 三者三様の面白い興味深いお話ばかりでした。本日は貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2021年12月7日　LifeWork Cafeにて

参加者プロフィール

安東 陽子（あんどう ようこ）

テキスタイルデザイナー・コーディネーター
株式会社安東陽子デザイン代表

東京生まれ。武蔵野美術大学短期大学部卒業後、テキスタイルデザイン会社で勤務。2011年「安東陽子デザイン」設立。数多くの建築家とのコラボレーションで、さまざまな空間にテキスタイルを提供している。

岡安　泉（おかやす いずみ）

照明デザイナー
岡安泉照明設計事務所

1972年神奈川県生まれ。1994年日本大学農獣医学部卒業。生物系特定産業技術研究推進機構を経て、2000年より2007年まで照明器具メーカーに勤務し、2005年 ismi design office 設立。建築空間・商業空間の照明計画、照明器具のデザイン、アートインスタレーションなど光にまつわるデザインを国内外問わず行っている。

小林 賢二（こばやし けんじ）

造園家
小林賢二アトリエ

明治大学、桑沢デザイン研究所で建築・デザインを学び、剣持デザイン研究所、苑環境計画を経て、1993年より小林賢二アトリエ主宰。土・石・水・草木を主な素材にした造園・造形・アートワークの制作を行っている。

インタビューをふりかえって

デザイナーとひと括りにしてもその定義は幅広く、ある意味建築家もまたその一部とも言えます。そんな我々と守備範囲は異なれど、それぞれの立場でクリエイティブに建築の価値を生み出す、我々にとっては“相棒”ともいうべき方々に今回は集まっていただきました。

安東陽子さん、岡安泉さん、小林賢二さんは、それぞれテキスタイル、照明、造園とフィールドは異なりますが、そこには不思議な共通点がありました。それはそれぞれ大学では現在とはまったく異なる専攻を学び、また職種に就かれていたということ。それぞれの転機から現在のお仕事に辿り着いたようですが、そのターニングポイントにはメンターともいうべき建築家との出会いもあったようです。そのためか、お三方の仕事への向き合い方や発想には固定観念がありません。安東陽子さんはそれを「普通の感覚」「毎回リセットして臨む」といった言葉で語ってくださいました。

一方で建築家との協働においては、空間に関わる重要な決断を丸投げされたり、現実性に乏しい要望を出す相手との仕事はうまくいかないとも。またなるべく早い段階から（時にプランすらも立ち上がる前から）関わりたいとおっしゃっていたことも印象的でした。

これは我々がクライアントに願う気持ちとも同じかもしれません。要は相手に対するリスペクトの問題なのだと思います。お互い忌憚なく語り合うことで、我々建築家だけでは浮かばなかったような発想が生まれ、より魅力的で独創的な空間へと昇華する。それこそが我々にとって、デザイナーとの協働における最大の醍醐味と言えそうです。

（『Bulletin』編集長　関本竜太）